

学びの芽生えを育む園生活から小学校教育へのつながりを探る — K幼稚園の5歳児の観察記録からの検討 —

“Exploring connections between the life of a child in kindergarten that nurtures the sprout of learning and the life in elementary school”
— Consideration based on observation records of 5-year-old children
at K Kindergarten —

青木好代*

(令和2年1月29日受理)

要約

本稿では、K幼稚園での保育活動に着目し、園生活の中で生まれていく「学びの芽生え」を記録から探っていった。そこから幼児の活動に具体的に見られた学びの芽生えを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「小学校生活科における内容構成の具体的な視点」とに照らし合わせることを通して、幼稚園の生活と小学校教育の学びの接点を考察し、幼児期の教育の望ましい方向性を探っていくことを目的とした。その結果、K幼稚園における幼児の活動の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の評価から、「生活科の内容構成の具体的な視点」へつながっていくことを捉えることができ、また遊びを中心とした子どもの生活の自然な志向に沿った保育における経験が、子どもの学びの芽生えであるとして確認できた。

キーワード：学びの芽生え、幼稚園教育、小学校生活

keywords：sprout of learning, kindergarten education, Life Environment Studies in elementary school

1. はじめに

平成29年3月31日に行われた幼稚園教育要領の改訂は、平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、幼稚園教育において育みたい資質・能力を明確にすること、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確にし、小学校の教師と共有するなど連携を図り、小学校教育との円滑な接続を図ることを基本的なねらいとして行われた。すなわち学校教育の基盤を培う役割を担う幼児期の教育は、小学校以降の子どもの発達を見通して行うことの重要性はもとより、小学校以降との接続の強化という方向性が示されたことと捉えられる。保幼小の接続は当初「小1プロブレム対策」が中心であったが、次第に「教育の接続」へと変化し、接続の目的や意義が変わってきている¹⁾。さらに幼児教育後半のカリキュラムの中に、芽生えの自覚化

を子ども自身ができるような取り組みを目指すことが、相互の教育を尊重しながら相方をつなぐ手立ての一つとして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示された。一方、小学校教育に於いては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を考慮しつつ教育活動を実施することが求められている。幼児期の教育と児童期の教育については、遊び中心と教科中心という教育方法の違いはあるものの、子どもの「発達」や「学び」は連続している。つまり子ども一人一人の発達や学びは幼児期と児童期の間ではっきり分かれるものではなく、つながっているのである。幼児期と児童期における教育課程の構成原理やそれに伴う指導方法等には、発達段階の違いに起因す

(*あおきたかよ 兵庫大学短期大学部非常勤講師 幼児教育学)

る違いが存在するものの、こうした違いの理解・実践は、あくまで両者の目的・目標が連続性・一貫性を持って構成されるとの前提に立って行われなければならない²⁾。

保幼小接続が目指すのは、幼児期の教育と小学校教育が相互理解を深めながら、お互いの独自性を保持しつつ、その時期にふさわしい取り組みがなされていくことにある。

幼児期は子どもたちが遊びの中で、楽しみ、試し、工夫し、見通しを持ち保育者の援助を得ながら遊びを発展させていく。そして、その活動の中で培われていく能力を「遊びを通しての学び」として捉えている。近年では、幼児期の教育における遊びは就学以降へつなぐ「学びの芽」や「学びの芽生え」の時期として位置づけられている。そもそも「学びの芽生え」とは、学ぶことを意識しているわけではないが、楽しいことや好きなことに集中することを通じて、様々なことを学んでいくことであり、幼児期における遊びの中での学びである³⁾。こうした学びの芽生えを大人がどのように紡いで、方向づけていくかが幼児期に大切にしなければならない保育であり教育であろう。この「学びの芽生え」を小学校以降への教育へとつないでいく役割を果たすものが小学校低学年の教科である生活科であり、スローステップとしてその役割を担っている。

和田らは、「生活科の誕生は、幼児期の遊びを中心とした総合活動と教科による分化した学習活動を接続する役割を果たす」⁴⁾ (和田ら, 2013)とし、設置するときから幼児教育と学校教育を接続する役割が期待されている⁵⁾と捉えている。

小学校学習指導要領解説生活科の学習には、「具体的な活動や体験を通しての学びと共に、自分と対象との関わりを重視する」⁶⁾という特質を持っていると示されている。例えば、自然を利用したり、身近なものを使ったりして遊ぶ活動を行うことを通して、遊びや遊びに使う物を様々な考え工夫してつくり、遊びの面白さや自然の不思議さに気付く。こうして活動し、考え、表現し、気付くことによって、みんなと楽しみながら遊びを作り出そうとする児童の姿が実現していくと考えられ

る。このようなことから子どもの自発的な学習・活動を尊重し、子どもの興味・関心あるいは生活経験に基づいて編成される幼児期の経験カリキュラムに多分に似通っていると筆者は捉えている。ゆえに小学校入学間もない児童にとって生活科での学びは、馴染みやすく、容易に受け入れられる教科であると捉えられる。

加えて今回の改訂では、幼児の園修了時の具体的な姿であり、保育者が指導を行う際に考慮するものとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。つまり幼稚園において育みたい資質・能力を育てる姿勢をもって教育することであり、それらが保育内容の中でどのように伸びていっているかを示すものが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である⁷⁾。こうした子どもの姿は、これまでからも幼稚園教育を通して培われていたものであり、卒園前の5歳児の成長した姿として筆者は捉えてきた。

そこで本稿では、自然と季節を大切にし、子どもの遊びの伝承が文化として根付いているK幼稚園での保育活動に着目し、園生活の中での活動や経験を通して育まれていく「学びの芽生え」を記録から探っていくことにした。そして幼児の活動に具体的に見られた学びの芽生えを、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」によって評価し、次に「小学校生活科における内容構成の具体的な視点」と照らし合わせることを通して、幼稚園の生活と小学校教育の学びの接点を考察した。この2点をもとに幼児期の教育の望ましい方向性を探っていくことを目的とした。

2. 方法

H県N市K幼稚園の5歳児の園庭活動の写真撮影及び活動のエピソード記録をもとに、写真撮影及び活動のエピソード記録をもとに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「小学校生活科における内容構成の具体的な視点」照会し検討した。さらに「小学校生活科における内容構成の具体的な視点」との関連を探っていくこととした。

記録は2016年5月～2018年2月のうち計10回、9:30～12:30分の保育時間に収集したものから、

5歳児の園庭活動10例を取り上げて考察した。

なお本研究は、事前に園長に説明書を通じて写真撮影、観察及び研究使用の説明を行った。さらに保育者、保護者については園長を通じて研究方法の説明がなされ、苦痛を感じる場合は研究者対象としないなどの倫理的配慮を行った。

本稿における園児の写真使用、掲載については、園長から保護者に口頭で説明し、個々に了承を得ている。

3. 結果と考察

以下に、表1「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁸⁾表2「小学校生活科の内容構成の具体的な視点」を示した。次に5歳児の保育活動の写真とエピソード記録を示した。

表3は、10例のエピソード記録を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と小学校生活科の内容構成の具体的な視点」で評価し、その関連を示したものである。

なお、筆者は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園等々と小学校の教員が持つ5歳児修了時の姿が共有化されるものであり、5歳児後半の評価の手立てとなるものであると位置付けた。また、「小学校生活科の内容構成の具体的な視点」は、具体的な活動や体験を通して学ぶとともに、自分と対象との関わりを重視するという生活科の特質を基に構成されている。そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「小学校生活科の内容構成の具体的な視点」を同等の方向性であると捉えられるものを関連づけて横欄に整理した。加えて生活科の内容構成の具体的な視点が含まれると考えられる幼児の活動の姿を幼児の活動における「学びの芽生え」として位置づけ、整理した。

(1) 比較検討

表1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

①健康な心と体
②自立心
③協同性
④道徳性・規範意識の芽生え
⑤社会生活との関わり
⑥思考力の芽生え
⑦自然との関わり・生命の尊重
⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
⑨言葉による伝え合い
⑩豊かな感性と表現

幼稚園教育要領解説より抜粋

表2 「小学校生活科の内容構成の具体的な視点」

ア. 健康で安全な生活
イ. 身近な人々との接し方
ウ. 地域への愛着
エ. 公共の意識とマナー
オ. 生産と消費
カ. 情報と交流
キ. 身近な自然との触れ合い
ク. 時間と季節
ケ. 遊びの工夫
コ. 成長への喜び
サ. 基本的な生活習慣や生活技術

小学校学習指導要領解説より抜粋

(2) 5歳児の園庭活動でのエピソード

【エピソード記録1 2017年6月 蝶を放つ】



緑豊かな園庭では毎年春先になると、5歳児が保育者と一緒にミカンの木に産み付けられる蝶の卵を探す。今年も葉っぱの裏に小さな卵を見つけ、保育者の援助を得ながら継続的な観察や世話をしてきた。6月のある日、羽化した蝶を放そうとの5歳児の呼びかけで、みんなが集まってきた。「せーのっ！イチ・ニーノ・サーン」の子どもたちの声と共に一斉に飛び上がった蝶々。一気に高く舞い上がったり、ひらひらと子どもたちの周りを飛びかかったり、帽子の上に留まる蝶もいる。「また、幼稚園に帰ってきてね」「バイバイ元気だね」と笑顔いっぱい手を振る子どもたちがいる。

【エピソード記録2 2017年6月 縄跳びに挑戦中のA子】



園庭では前跳びで1000回をクリアしたA子が、台の上でさらなる記録に挑戦している。その挑戦を応援する意味で一緒に跳んでいる保育者がいる。園長もリズムをとりながら数を数え、笑顔で見守っている。台の周りには、いつの間にか同じクラスの子どもや3歳児、4歳児までが集まりだし、中には園長と一緒に数を唱える子どももいる。A子の挑戦は延々と続いた。そのうち園庭活動が終わり、徐々に子どもたちは入室していった。その後もA子とひたすら数を数える園長と二人だけの挑戦が続いていた。この日A子が縄跳びを跳んだ記録は2135回だった。力を出し切り跳び終わったA子を「よく頑張ったね」と園長はぎゅーっと抱きしめた。

【エピソード記録3 2017年11月 綿の実の掃除】



遠く離れた農園で世話をしていた綿が実り、収穫した。保育者の説明を聞いて、園庭に設定したテーブルの上で、数日前から年長児がごみを取る作業をしている。「フワフワだねー」「こうするといいよ」「これをとるんだよ」「こんなのになっちゃった」等々とおしゃべりが弾み、楽しそうに作業をする声が聞こえている。その様子を3歳児たちがじっと覗き込んでいる。すると一人の女兒が「ここに来てもいいよ」と誘い、丁寧に掃除の仕方を説明してやっている。そののち、綿は糸に紡がれ保育者の援助によって布に織られ、卒園前の作品として活かされた。

【エピソード記録4 2017年11月 イチゴ畑で】



園庭ではないがイチゴ畑で草引きをした活動である。春には美味しいイチゴが出来るようにと草引きの大切さの説明を聞いた後、子どもたちは作業開始。「ここにもある」「こっちにもある」「○本引いたよ」「かたーい、Sちゃん手伝って」と賑やかな声が聞こえている。引いた草の数を友達と言い合ったり、自慢げに保育者に伝えたりしている。中には小さな虫の様子をじっと見ている子どももいる。

【エピソード記録5 2017年11月 チームを決めるじゃんけん】



「丸ドッチしよう」とチームを決めるじゃんけんをしている5歳児たち「じゃんけんほい・あいこでしょ」。人数が多くてなかなか勝負が決まらない。するとその掛け声もだんだんと大きくなっていく。そのうち誰が言い出したのか、いつの間にか「うらおもて」の掛け声に代わっている。3パターンのじゃんけんでは、なかなか決まらないので、2パターンの方法に切り替えている。その様子を4歳児が、少し離れた所から笑顔で見守る保育者の姿もある。

【エピソード記録6 2018年2月 けん玉で遊ぶ】



今日も「もしもしかめよ」の曲が流れ出した。するとテラスに難易度別に用意してあるけん玉の中から、各々自分のできるものを取り、リズムに合わせて子どもたちが操りだした。巧みに操る5歳児、ゆっくり自分のリズムに合わせてながら操っている子、その様子を真剣に見ている4歳児たちがいる。けん玉が無理な子どもたちのためにお手玉の用意があり、手のひらに乗せてリズムをとっている。そのうち曲が「ジンギスカン」変わった。傍にいた二人の保育者が加わり、子どもたちと共に真剣な表情で丸い球を見つめ全身でリズムをとっている。

【エピソード記録7 2018年2月 どんじゃんけん】



保育者の援助を受けながら、地面に渦巻きを描き、外側と内側のチームに分かれて「どんじゃんけん」遊びを楽しんでいる。子どもたちが真剣に見つめる先は、O君と先生との勝負の行方。負けると急いで応戦に走り出さなければならない。じゃんけんをする二人にチームの勝敗がかかっているため、双方とも負けるわけにはいかない。

【エピソード記録8 2018年2月 泥だんご作り】



園舎の片隅には、泥だんごを作る最適の場がある。そこにはサラサラの乾いた土がたまり、今日も年長児が集まって泥だんごを作っている。そこへ実習生のT先生が加わり活動が続いていた。「はじめは、ぬれた砂を使うんだよ。そしてね！サラサラをふって、ギュギュッと握って、また、ぬれた砂、次にさらさらと交代でしていくんだ」と泥だんごの作り方を丁寧に説明しているKちゃん。「そうなんだ！ちょっと難しいね。Kちゃん上手に出来てるね。」と子どもたちと共に泥だんご作りに挑戦している。

【エピソード記録9 2018年2月 砂場遊び】



寒さも気にせず半ズボンに素足で泥遊びを楽しんでいる5歳児。「Yちゃん！もっと水持ってきて」「川をとめてダムにしようよ」「Oちゃん！もっと向こうへのぼして」との話し声が聞こえている。傍らには、その様子を興味深く見つめている3歳児がいる。

【エピソード記録10 2018年2月 冬の昔遊び】



朝のテラスや園庭には、昔遊びのおもちゃがたくさん並んでいる。子どもたちが描いた羽子板、大小数種類の駒、その側には円形のこま回し専用台、缶馬、竹馬等々が置いてある。登園してきた子どもたちは、気に入ったものから手に取り、友だちと遊んだり、先生と競争したりしている。見ているだけの子どもたちには、保育者が「一緒にしよう」と誘いかけている。

(3) エピソード記録1～10の考察

1. 「蝶を放つ」：卵から大事に育てた蝶を自然に返すことを理解している5歳児たちが放蝶することは、⑦自然との関わり生命の尊重する体験であり、キ. 身近な自然との触れ合い、ク. 時間と季節、コ. 成長への喜びへのつながりと感じられる。また、放つ時間や場所をみんなで考え話し合うことは、⑥思考力の芽生えや⑨言葉による伝え合いであり、カ. 情報の交換、イ. 身近な人々との接し方とのつながりが考えられる。そして、「また、帰って来てね」「元気に飛んで行ってね」との声掛けには、蝶に対する思いやりや優しさが心の中に秘められていることだろう。そこには、キ. 身近な自然との触れ合いを通して、⑩豊かな感性と表現が培われている。

2. 「縄跳び記録に挑戦中のA子」：園庭で縄跳びをすることは、①健康な体であり、目標に向かって挑戦していくA子の姿は、②自立心の芽生えであり、縄を跳ぶ技術を習得し熟練していくことにもなる。保育者や観ている子どもたち

が跳ぶ数を数えることでは、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚が培われていく。また、友だちと跳べた数を伝え合ったり比べたりすることは、カ. 情報と交流へとつながっており、ア. 健康で安全な生活でもある。そのうえ友だちよりもっとたくさん跳ぼうとする挑戦への意欲が培われることにもなる。

3. 「綿の実の掃除」：収穫した綿を保育者の指導を受けながら5歳児が中心になり掃除している。仲間と共にその工程に関わっていくことや綿の実の掃除をすることは、自分でやってみようとする②自立心でありそこからは、オ. 生産と消費、また、サ. 基本的な生活習慣や生活技能へとつながっていく。綿の柔らかかくふわふわした感触に触れ、友だちと会話をしながら行う作業は、⑩豊かな感性と表現や⑨言葉による伝え合いであり、キ. 身近な自然と触れ合いながら、カ. 情報と交流が行われている。そこへ3歳児がやってきて作業に加わったエピソードは、5歳児の年少児に対する思いやりが感じられ、④道徳性・規範意識の芽生えに通じる。そ

こからイ、身近な人々との接し方、コ、成長への喜びへのつながりと捉えられる。

4. 「イチゴ畑で」：6月にイチゴ狩りをし、大好きなイチゴを味わった子どもたちが草引きをすることは食育にも通じる活動である。作業を通じて培われる①健康な心と体、ア、健康で安全な生活である。畑で目にする様々な雑草や昆虫との出会いは、⑦自然との関わり生命尊重の項目の視点であり、キ、身近な自然との触れ合い、ク、時間と季節とに関連する。子どもたちが引いた草の数を数えたり、保育者に伝えたりすることは、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、カ情報と交流として捉えられる。また、季節の変化と共に、その姿を変えていくイチゴからク、時間と季節の経過を子どもたちは感じているのではないだろうか。

5. 「チームを決めるじゃんけん」：子どもが園庭でルールやマナーを守って遊ぶことを通して、①健康な心と体、④道徳性・規範意識の芽生えが培われ、ア、健康で安全な生活、エ、公共の意識とマナーへとつながる。多人数で行うじゃんけんは、決着がつかないので3パターンから2パターンのへ切り替える工夫や話し合いをしている様子は、⑥思考力の芽生えであり、ケ、遊びの工夫へとつながっている。お互いに思いを伝え合うことは、⑨言葉による伝え合い、②自立心であり、カ、情報の交換、イ、身近な人々との接し方へとつながっている。

6. 「けん玉で遊ぶ」：寒い冬の朝、リズムに乗ってテラスでけん玉をすることは、①健康な心と体が養われる活動であり、ア、健康で安全な生活へとつながっている。けん玉を上手に操ろうと何度も何度も挑戦していくことから子どもたちは、技術が磨かれ熟練されていくことで、②自立心や⑩豊かな感性と表現が培われている。また、友だちと一緒に共通の目的の実現に向けて工夫したり考えたりしていく姿から、③協同性、⑥思考力の芽生えが培われ、⑨言葉による伝え合いも磨かれていき、ケ、遊びの工夫やカ、情報と交流へつながっていくと考えられる。また、先生や〇〇君のように上手になりたいとい

う憧れが挑戦意欲をも促している。

7. 「どんじゃんけん」：集団活動の中で、ルールやマナーを守ろうとすることは④道徳性や規範意識の芽生えや⑥思考力の芽生えであり、エ、公共の意識とマナー、カ、情報と交流、コ、成長への喜びへとつながる。仲間に声援を送ったり応援することは、③協同性や⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現であり、ケ、遊びの工夫や②自立心をも培うことになる。園庭での活動を通して、①健康な心と体が育まれ、ア、健康で安全な生活へとつながりが見られる。

8. 「泥だんご作り」：子どもたちの作り出す泥だんごには子どもの信望強い努力と忍耐力が詰まっている。幾度となく柔らかい砂やサラサラの土を塗り重ね、手のひらで丁寧に磨き上げる作業は、根気よく繰り返さなければ出来上がらない。この活動の中には、①健康な心と体、②自立心、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命の尊重、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現が培われている。具体的な視点では、ア、健康で安全な生活、オ、生産と消費、カ、情報と交流、キ、近な自然との触れ合い、ケ、遊びの工夫、コ、成長への喜びへとつながるものである。

9. 「砂場遊び」：子どもたちは砂場遊びが大好きである。寒くても冷たくても気にすることなく、仲間と共にダム作りを楽しんでいる。そこでは⑦自然との関わりを通して⑥思考力が芽生え、⑨言葉による伝え合いが捉えられる。ダム作りという目的をもって仲間と共に活動することを通して⑩豊かな感性と表現や③協同性が培われている。具体的な視点へは、ア、健康で安全な生活、カ、情報と交流、キ、自然との触れ合い、ケ、遊びの工夫へとつながっている。

10. 「冬の昔遊び」：こま回しや竹馬、羽根つきなどの昔遊びは練習を要するものであり、出来るようになるまでの努力が大きく、①健康な心と体、②自立心、⑥思考力の芽生えとして捉えられる。しかも出来た時の喜びや達成感は計り知れないものがあり、そこでは⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現が培われている。ま

表3 エピソード記録1～10の比較検討

5歳児の活動評価	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	小学校生活科の内容構成の具体的な視点
1. 「チョウを放す」	① ⑥ ⑦ ⑨ ⑩	イ キ カ ク コ
2. 「縄跳びに挑戦中のA子」	① ② ⑧	ア カ ケ コ
3. 「綿の実の掃除」	① ② ④ ⑨ ⑩	ア オ キ コ サ
4. 「イチゴ畑で」	① ② ⑤ ⑦ ⑧ ⑨	ア ウ オ キ ク
5. 「チームを決めるじゃんけん」	① ④ ⑥ ⑨	ア イ エ カ ケ
6. 「けん玉で遊ぶ」	① ② ③ ⑥ ⑧ ⑨	ア エ カ ケ
7. 「どんじゃんけん遊び」	① ② ③ ④ ⑥ ⑨ ⑩	ア エ カ ケ コ
8. 「泥だんご作り」	① ② ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩	ア オ カ キ ケ コ
9. 「砂場遊び」	① ③ ⑦ ⑨ ⑩	ア カ キ ケ
10. 「冬の昔遊び」	① ② ④ ⑥ ⑧ ⑨ ⑩	ア エ オ カ ケ コ

た、共同で使うことを通して④道徳性や規範意識が芽生える。友だちと共に数を数え合うことは、⑧数量や図形、標識や文字への関心・感覚をも養うことになる。そこから具体的な視点へは、ア. 健康で安全な生活、エ. 公共の意識とマナー、オ. 生産と消費、カ. 情報と交流、ケ. 遊びの工夫、コ. 成長への喜びへとつながっていく。

以上のようにK幼稚園の5歳児の具体的な活動を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」によって評価し、「小学校生活科の内容構成の具体的な視点」と照らし合わせたところ多くの重なりが見られ、幼稚園の生活と小学校教育の入り口として作られた生活科への学びへのつながりが確認された。そこで以下の表3に5歳児の活動と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「小学校生活科の内容構成の具体的な視点」との関連について一覧にした。

表3に示した「小学校生活科の内容構成の具体的な視点」は、アからサまで9項目に分類されており、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と同等の視点として筆者が分類している。

なお表3の分類は筆者が複数回の検討によって分類した。しかしながらさらに精度を高めるために複数回の検討が必要である。また、幼稚園教育における子どもの活動や体験からの評価は総合的

に捉える視点から観察した活動は、表3の①から⑩の姿として分類したが、重なりがあるものとして捉えることが自然である。

4. まとめ

今回の分析は5歳児の活動のみであった。しかしながら実際K幼稚園の子どもたちは、3年間という保育生活を体験し、その時間の流れの中でさまざまな知恵や力が丁寧に育まれ積み上げられ土台となり、年長クラス5歳児の姿がある。例えば、今回、「縄跳び記録に挑戦中のA子」のエピソードでは、入園間もない3歳児が保育者が回す大縄の列に並んでいる姿を度々目にした。3歳児が縄の横に立つと大縄を回す保育者は、子どもの力に合わせながら「びよんびよんして」、「ジャンプ、ジャンプ」と必死に声をかけながら丁寧に縄を操り、その子の足の下を縄をくぐらせる。すると「出来た気分」、「やったぞ」の満足に笑顔があふれる。それが積み重なり次へと進んでいく。5歳児になるとひとり用の縄でのひとり跳び、走り跳び、後ろ跳び、けんけん跳び等々とそのパリエーションも広がり、自己記録へと挑戦していく姿がある。中には、そう簡単にいかない子どもたちもいる。そこには誘う、待つ等々、いつ動き出すか、その気持ちの変化を逃さずに援助していく課題も保育者に求められる。

阿部⁹⁾によると「人は、生まれながらにして育とうとする力(向かう力)を有し、周囲との応答による関係性の中で成立していくという自発性の根源を出生直後から見ることができる。この無方向に外へ向かう力は、周囲とのやり取りを通しておおよそ周囲の期待する方向へと世界を広げていくことになり、自分ですることへの意欲を育てていく。この自分でしようとする意欲(自発性)が子ども自身を育てていく。」と述べている。阿部の見解にみられるように、K幼稚園では子ども自身の育とうとする力を信じ、園生活を通して子どもたちの中から生まれた自発的な遊びのきっかけを丁寧に読み取り、保育者が気づき、大切に育てていこうとする援助のあり方の重要性が理解できる。

本観察から園生活の中で、環境を通して自らの体験で学ぶ幼児期の子どものためには、遊びの環境が整えられていることの大切さはもちろんのこと、保育者が寄り添い見守り、認めたり励ましたり、時には少し前へと課題を与える様子が捉えられた。子どもの何気ない気付きや発見、驚きなどを保育者が一緒に感動し、子どもにフィードバックすることで、思考力や認識力、意欲等が育まれていく。エピソードでは、保育者と一緒に草取りやどんじゃんけん、けん玉を楽しむ。また、保育者に支えられながら縄跳びに挑戦したり綿の掃除や蝶を放つ。チーム決めのじゃんけんや泥だんご作り、砂場遊びは静かに保育者が見守っている。このような園の日常生活の中での一見さり気ない関わりや援助が子どもの思いや行為を価値付け、自発性から主体性へ「学びの芽生え」が育っていくと考えられる。

「幼児の活動に見られる学びの視座からの検討」を行った山本¹⁰⁾は、遊びを通しての学びの契機のひとつは子どもからの人的・物的環境への関わり、子どもの環境の取り組みによって芽生えている。ふたつめは、活動の遂行のプロセスの中で保育者の指導援助が鍵になっていたとし、保育者の関わりは、子どもが活動に見通しを持ったり、意欲が生まれ活動を深めたりするような働きをしていと捉えている。しかし反面、保育者の援助方

法によっては子どもに負の働きをしてしまうことに留意しなければならないことも指摘している。

K幼稚園には、四季が織りなす自然を保育の中に取り入れ、園庭やテラスには、子どもたちが思わず関わりたくなるような多くの仕掛けや工夫等々、常に丁寧な環境構成がなされている。その環境の中には、保育者のねらいや思いが散りばめられ子どもたちの興味や関心を誘いかけている。人的環境である保育者は、遠過ぎず近付き過ぎず子どもたちの傍らにいていつも見守り、時には子どもたちの中に入り一緒に遊びを楽しむ、そんな自然な姿を大切に日々の保育である。そこから具体的な活動や体験を通して学んでいく生活科との多くのつながりが捉えられた。このような遊びを中心とした、子どもの生活の自然な志向に沿った保育における経験が学びの芽生えを育てていくのではないだろうか。K幼稚園での遊びを中心とした園生活の中から、多くの学びの芽生えが育まれていることをエピソード記述から確認できた。

乳幼児教育にかかわる我々は、乳幼児期の保育を通して大切に育てていかねばならない子どもたちの姿を「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」として念頭に置き、小学校生活への入り口である生活科へとしっかりバトンを渡していかねばならない。

観察にあたり、また研究としてまとめる際に、園長と何度も「子ども」「子どもの育ち」について子どもの生活の実際の場面を見ながら、また保育後にその日のことを話す機会を持つことができた。その中で園長は、子どもがどんどん遊びに打ち込み、それが仲間を呼び、次にと展開していくことについて、「非認知能力の育ち」をことばにされていた。幼児期、「自分の力で」「いつのまにか」いろんなことができるようになってほしい、それには子どもの興味、関心を持つような環境があること、そこには何よりも大人のまなざしと援助が大切である。教えられて獲得するという道順ではなく、手間ひまかけて大人が寄り添う、それが幼児期の子どもへ大人のあるべき姿でありたいと願っている。また、小学校の生活科への期待を大

大きく思っておられることが伺われた。

今回の研究がその一歩であることを願って応援いただいたように思います。

謝辞

本稿作成にあたり、共同幼稚園の園長先生始め、諸先生方に研究目的の趣旨を理解していただき、数日にわたる保育観察の際に、保育中に園児と共に自然に観察者を温かく受け入れ、ご協力をいただきましたことに御礼申し上げます。

付記

本研究は、平成29年度兵庫教育大学幼年教育実践学会研究奨励金をうけ、菅澤順子氏（西宮公同幼稚園）、山本淳子氏（大阪キリスト教短期大学）と共に共同研究を行った。

本文は平成30年10月に開催された幼年教育実践学会総会・研究発表2「園生活に組み込まれた学びの芽—子どもの世界と人・もの・ことがらに関わることの分析と検討から—」の共同研究のうち、著者の研究発表部分について加筆訂正を行ったものである。

〈引用文献〉

- 1) 渡邊恵子 (2017) 幼少接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究〈報告書〉 国立教育研究所 教育センター 30頁
- 2) 指導書の手引き“幼児期と児童期の「学び」の接続の推進に向けて”(2014) 兵庫県教育委員会 2頁
- 3) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)(2010) 調査研究協力者会議
- 4) 和田信行・清水一豊・茂木三枝 (2013) 「幼児教育と生活科の連携」せいかつか&そうごう 第20号 52-59頁
- 5) 文部科学省 (2010) 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」
- 6) 小学校学習指導要領解説 (2017) 23頁~25頁 文部科学省
- 7) 無藤隆「幼児期の終わりまでに育ってほしい

- 姿」東洋館出版社 (2017) 296頁
- 8) 幼稚園教育要領解 (2018) フレーベル館 50頁~72頁
- 9) 保育用語辞典 (2013) ミネルヴァ書房 123頁 309頁
- 10) 山本淳子 (2019) 幼児の活動に見られる学びの視座からの検討—R児とL児の活動の分析から— 大阪キリスト教短期大学紀要 第48号 76頁

〈参考文献〉

1. 垂見直樹 (2012) 保幼小のつながりをめぐる動向と論点 近畿大学九州短期大学研究紀要第42号
2. 兵庫県教育委員会 (2014) 指導の手引き 幼児期と児童期の「学び」の接続の推進に向けて
3. 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 (2018) 54-71頁
4. 青木好代 (2016) 保育実践からひも解く子どもの主体性 —幼稚園での観察から— 兵庫教育大学幼年児童教育研究 第28号